

# 中世ヨーロッパにおけるアルプス山脈

— ドイツ諸侯の事例を中心に —

Alps in medieval Europe,  
a Case Study of the German aristocracy.

桑野 聡\*

Satoshi KUWANO

The topic of the Gotthard-Base tunnel, which was opened on June 1, 2016, was the news of interest in considering the formation of a European cultural area. We are faced with a large transformation of Europe image which is symbolized by the collapse and the EU enlargement of the Yalta system of the end of the 20th century, to try to consider the Europe of the North-South problem in considering the historical development of Europe, diversity when considering the Europe through the integration of such various elements and regions, it could say a valuable attempt. Therefore, this time will be discussed with attention to modernize the previous north-south European relationship in the Alps. Specifically, Northern European cultural area (Germany) and advanced civilization the world and awareness has been Southern Europe cultural sphere of the historical role of the Alps that connects the (Italy), to consider the German nobility of medieval Europe in the clue. Ties with Italy in Rome line and South German aristocracy of the Holy Roman Emperor, clergy and man of culture, success of merchants to foster community in the Alps region, to note that prompted the self-reliance.

## はじめに

2016年6月1日、アルプス山脈を貫通して南北ヨーロッパを結ぶゴットタルド基底トンネル (Gotthard-Base tunnel) 開通のニュースは、シリア難民の受け入れ問題などで不協和音が指摘されるEUにとって久々の朗報として話題となった。スイスのウーリ州エルストフェルトとティチーノ州ボディオを繋ぐ全長57.1kmのこの鉄道トンネルは、日本の青函トンネルの53.9kmを抜いて、世界最長トンネルとなったことでも注目を集めた。このトンネルを250km/hの旅客列車が通常運行できるようになることで、チューリヒ・ミラノ間の所要時間は3時間40分から2時間40分へと約1時間短縮されることとなった。トンネルの建設はスイスの国家事業「アルプトランジット計画」の一環として進められ、17年の年月と総工費80億3500万スイスフラン

---

※ 文化学科

(日本円約1兆4800万円)の巨費が投じられた<sup>1</sup>。



資料1 ゴットアルド基底トンネルの経路図

(朝日新聞デジタル版 2016年6月1日 <http://www.asahi.com/articles/photo/AS20160601004973.html> より引用)

「ヨーロッパの屋根」と称されるアルプス山脈は、ヨーロッパの歴史を辿る上で常に南北ヨーロッパを分ける政治的・文化的・経済的「壁」であり続けてきた。それは、18世紀の啓蒙主義時代以降に近代的なヨーロッパ意識が形成された後も、更には産業革命の進展によって鉄道網がヨーロッパ各地を繋いだ19世紀後半以降も、その特徴を少なからず保持し続けてきた。20世紀後半には「鉄のカーテン」によって東西ヨーロッパの差異が先鋭化した<sup>けいもう</sup>が、ギリシアに端を発するEU圏内における南欧諸国の経済危機問題は、改めて南北ヨーロッパの差異を浮き彫りにしたとも言える。その意味でも今回のアルプス山脈を貫く高速トンネルの開通は、ヨーロッパの将来像にとって大きな意味を持っていると言えるだろう。

現在私たちは、20世紀末のヤルタ体制の崩壊とその後のEU拡大に象徴されるヨーロッパ像の大転換に直面している。こうした中で、ヨーロッパの歴史的展開を考える上でヨーロッパの南北問題を検討してみることは、多様な諸要素と地域の統合によるヨーロッパを考えると、有益な試みといえよう。それ故、今回は近代化以前の南北ヨーロッパの関係をアルプス山脈に着目して考察してみたい。具体的には、北ヨーロッパ文化圏(ドイツ)と先進文明世界と意識された南ヨーロッパ文化圏(イタリア)を繋ぐアルプス山脈の歴史的役割を、中世ヨーロッパのドイツ貴族たちを手掛かりに、いくつかの視点から考察してみたい。

## 1 中世のアルプス交通路

アルプスの交通路は、ガリア・ゲルマニアへと勢力を拡大したローマ時代に既に17経路が開発されていた。とりわけ西部のサン・ベルナル峠や東部のブレンナー峠などが重要な交通路として中世に至るまで利用された。古代から中世への移行期に古代都市の衰退と農村化、これ

に適応した封建化が進むが、11世紀頃には安定期を迎えた西欧封建社会において商業活動が活発化する。北イタリア諸都市とネーデルラント（フランドル）諸都市の発展が南北ヨーロッパの商業圏を形成し、これを繋ぐ西欧の大動脈としてローヌ河・セヌ河・ライン河を結ぶルートが栄え、12世紀半ばから13世紀後半の時期にシャンパーニュ地方の諸都市がヨーロッパ各地の商人を集める定期大市（メッセ）の開催地として繁栄した。しかし、間もなく脆弱<sup>ぜいじやく</sup>だったフランス王権が強大化し始め、北フランス一帯に支配が及ぶようになると自由な経済活動を求める要求が、それまで以上にアルプス交通路の重要性を促すこととなった。北ドイツのハンザ諸都市の発展もこの時代からである。

シュルテの研究を引用する伊藤栄の論文に依拠すれば、中世には28のアルプス越えの通商路が確認される<sup>2</sup>。中でも特に重要なルートとされるのが以下の4つである。

- ① プレンナー峠： 古代ローマ皇帝セプティミス・セヴェルス（位193～211）が建設したとされるインスブルックの南に位置するアルプス東部の交通路。主要な交通路の中で最も標高が低く、最もよく整備された通路で荷車を安全に通行させられることから、アウクスブルク、ニュールンベルクやボーデン湖周辺の諸都市からケルンをはじめとするライン下流の商人たちも利用した。
- ② セプティマー峠： クール司教領に位置するアルプス中部の交通路。南のコモ湖からワレン湖、チューリヒ湖やリマ川、アール川などの河川を利用できることから多くの商人に利用された。
- ③ ゴッタルド峠（仏／サン・ゴタル峠・独／ザンクト・ゴットハルト峠）： 盛期中世（12～13世紀頃）に開かれたスイスのルツェルンからミラノに至る交通路。深い渓谷を越える難所だが、登坂に要する山岳地帯の距離が最も短く、マジョーレ湖、ルツェルン湖などの湖や河川を利用してバーゼルに至ることでライン河に繋がる最短ルートとしてライン下流やボーデン湖畔の商人たちが利用し、「アルプスの王道」と呼ばれることになる。
- ④ 大サン・ベルナル峠： 古代ローマからのモン・ブラン東側を通る交通路で、モン・ブランの南を通ってフランスに至る小ベルナル峠と対をなす西ルート。ジェノヴァ・ミラノからスイスに入り、レマン湖から北上してチューリヒ・バーゼルを経てライン河に通じるルートとジュネーブからフランスを経てフランドル地方に至るルートに分かれた。諸説あるハンニバルのアルプス越えの有力候補であるとともに、ナポレオンのイタリア遠征時に使われたことでも知られるが、中世後期にはゴッタルド峠の隆盛と共に衰退していった。

これらの中で最も新しい交通路が③のゴッタルド峠であり、冒頭で言及したゴッタルド基底トンネルのルーツということになる。盛期中世に開設され、今日に至るまでアルプス越えの交通路において重要性を保ち続けているゴッタルド峠の歴史を、以下ではヨーロッパ中世都市研究とスイス地域史に功績の大きい瀬原義生氏の研究に依拠して概観しておきたい<sup>3</sup>。

盛期中世以降、アルプス越えの交通路の中心となるゴッタルド峠の開発が遅れたのは、アルプスの最中央を通るこのルート of 険しい自然環境に原因の一つがあった。峠の頂にあたるアンダーマットから北のゲシェーネン間に位置するシェレーネン溪谷の険しさが問題であった。春には雪解け水で溢れるロイス川の急流とそそり立つ断崖絶壁が旅人を拒絶した。この難所に橋が架けられたのは、12世紀末～13世紀初頭と考えられており、この橋は「悪魔の橋」として知られている。また、この橋の架橋に関わるメルヘンが有名なアールネ＝トムスンの『昔話の型』にも「悪魔の橋」の類話として収められている<sup>4</sup>。これは、メルヘンを集団記憶として捉えるとき、ゴッタルド峠のシェレーネン溪谷が如何に当時の人々にとって大きな脅威として記憶されていたのかを教えてくれる。資料2は、1888年に出水のために壊れた橋を再建したものの(手前)で、現在はこの後ろに高架で自動車道路が建設されているのが確認できる。



資料2 現在のゴッタルド峠の「悪魔の橋」  
(<http://4travel.jp/travelogue/10620379> より引用)

瀬原氏の研究史の整理によれば、諸説あるゴッタルド峠の開通は12世紀後半～13世紀前半の時期に想定できそうである。盛期中世のこの時期に、ゴッタルド峠の北の終点にあたるルツェルン市の発展が確認されることなどが経済的・社会的背景として指摘されるが、注目されるのは当時の政治状況とも深く結びついたツェーリンガー族の領国政策と関連付けた指摘である。これに関しては、筆者も別の視点からの考察によって同意できる<sup>5</sup>。

ツェーリンガーは、ニーダーシュヴァーベンの有力貴族で、聖職叙任権闘争時には改革教皇派の擁立した対立国王ルドルフ・フォン・ラインフェルデンと結んで台頭し、シュタウファー王権とは、シュヴァーベン大公位をめぐる対立した。またブルグント国王代理職 (rector Burgundies) とチューリヒ帝国守護職 (Reichsvogtei) を得ることで現在のスイス地域に勢力を拡大した彼らは、アルプス地方にも大きな関心を向けることとなったと思われる。当時、シュヴァーベンに拠点<sup>はら</sup>を置くシュタウファー・ツェーリンガー・ヴェルフェンの三諸侯勢力は、相互に複雑な利害関係を孕みながら各自の権力基盤を確立すべく領国政策に邁進していた。シュタウファーの国王コンラート3世(位1138～52)に対抗するために1147/8年に結ばれたヴェルフェン＝ツェーリンガー同盟は、1152年の新国王フリードリヒ1世バルバロッサ(位1152～90)の選出によって転機を迎え、1156年にバルバロッサがブルグントの女相続人ベアトリクスと結婚すると、彼はブルグントからツェーリンガー勢力を締め出しに掛かった。アルプス西部の重要交通路の大サン・ベルナル峠は閉鎖され、ツェーリンガーをイタリアから遮断する政策が取られた。間もなくマインツ大

司教選出問題(1159/60)でもバルバロッサと衝突したツェーリンガーは、1161年に皇帝と敵対するフランス国王ルイ7世に皇帝批判の書簡を送って急接近した。こうした状況の中でツェーリンガーはスイス中央部から南下する新たな交通路の確保に向かわざるを得なかったのである。ゴッタルド峠ルートは、こうして誕生したと考えられる。

## 2 神聖ローマ帝国とアルプス山脈

19世紀の歴史学では、ナショナリズム的視点とも密接に関係しながら、当時の人々にとって疑うことなくヨーロッパ文明の源泉と考えられたギリシア・ローマ文明のアルプス以北への伝播、継受を学問的に説明しようとする試みが盛んにおこなわれた。古代から中世への移行、あるいは転換をどのように描き、評価するかをめぐる論争は、ルネサンス期以来の古典的な「古代文化没落論」にはじまり、第一次大戦後にオーストリアの中世史家アルフォンス・ドープシュによって提示された「古代文化連続論」やベルギーの経済史家アンリ・ピレンヌによる「ピレンヌ・テーゼ」の主張を経て、ヘルマン・オバンの指摘にはじまる文化融合を視野に入れたヨーロッパ文明の形成論へと発展し、現在の様々な見解に至っている<sup>6</sup>。

一個の文化圏としての「ヨーロッパ」は、様々な諸民族と地域文化を古代から継承したキリスト教とローマ帝国という枠組みがまとめ上げて、中世に形作られたと言える<sup>7</sup>。一般にカール大帝の800年の戴冠やオットー大帝の962年の戴冠をスタートとするとされる所謂「<sup>いわゆる</sup>神聖ローマ帝国」という存在は、その意味でこのヨーロッパの歴史的展開を如実に表していると言える。かつてドープシュは、これをローマ人からゲルマン人への文化の担い手の交代劇として評価しようと試みた<sup>8</sup>。ヨーロッパ文化の本質をギリシア・ローマにはじまる普遍的文明と考える当時の人々は、民族の問題をも同様に歴史を規定する普遍的な要素の一つと見做しており、こうした理解が政治的運動と結びつくことによって、歴史の真実が大きく歪められてしまったこともあった。しかし、本論の課題である中世におけるアルプスの役割を考えると、この中世のローマ帝国理念の存在は、面白い歴史的側面を浮き彫りにしてくれる。それは、歴代の国王・皇帝たちが行ったイタリア政策と呼ばれるドイツの君主によるアルプス以南への遠征と政治的駆け引きである。

カロリング朝フランク王国の創始者ピピン3世(位751～68)による751年のクーデタと、その後のランゴバルト討伐にはじまり、カールの戴冠(800)に至る展開は、一ゲルマン部族国家とローマ教会の結合による新しい社会的枠組みの構築として、ヨーロッパ史において特筆される<sup>9</sup>。その後、ルートヴィヒ敬虔帝(位814～40)から帝位を引き継いだ長子ロータル(位843～55)は、イタリアと中部フランクを保持することでカール大帝以来の新しい皇帝理念を継承した<sup>10</sup>。更に、ルートヴィヒ2世(位855～76)からカール2世<sup>とくとく</sup>禿頭王(位843～77)を経て、カール3世肥満王(位876～87)による東の間のフランク帝国再統一が達成されるが、ノルマ

ン人の侵略の中で統一は瓦解<sup>がかい</sup>していった。こうして皇帝の称号は「イタリア王」と大差ないものとなっていたが、東フランクのカルマンの庶子アルヌルフの時代までは、諸王に宗主権の支配を行使することが出来る可能性を保持していたと研究者は見ている<sup>11</sup>。しかし間もなく、西フランクにおける非カロリinger王権の誕生や東フランクにおけるカロリinger血統の断絶(911)による選挙王制のより明確な定着は、古典的なフランク的国家・帝国観からの脱皮をもたらすこととなった。

この9～10世紀の時期に各地で封建制の進展を促す分権化が進み、東フランクでは新旧部族と結びついた勢力が相互に拮抗し、北ドイツのザクセンを基盤とするリウドルフィンガー王権が誕生した。南ドイツ(バイエルン)の分離を阻止した国王ハインリヒ1世(位919～36)の後を継いで即位したオットー1世(位936～73)は、東方からのマジャール人の侵入を食い止めた後、群雄割拠の状態となっていたイタリアに遠征することで東フランク(ドイツ)とイタリアを再び結びつけた。その後、ローマ教会と深く結びついた皇帝権は、東ローマ(ビザンツ)皇帝権との関係や東西教会問題などで西方世界を代表する意識を醸成させていく。10～11世紀の修道院改革運動を歴代皇帝が支持した背景には、研究者たちが帝国教会政策という概念で扱ってきた政治的必要性や西欧独自の神権王権的な理念の形成も影響していた。

国王選挙の後にアーヘンで即位し、ローマ遠征をおこなって教皇から皇帝の戴冠を受けるという道筋が次第に整えられてくるが、この意味で叙任権闘争はヨーロッパの社会的枠組みを規定する重要な政治闘争であったと言える。皇帝ハインリヒ3世(位1039～56)は、イタリア遠征によって複数の教皇の乱立によって生じていたシスマを終わらせ(1046)、教会の善き守護者として称えられた。しかし、幼くして後継者となったハインリヒ4世(位1056～1106)と教皇グレゴリウス7世(位1073～85)は対立し、有名な「カノッサの屈辱」事件を引き起こした(1077)。この時のアルプス越えは、アルプス西部のルートを利用したと考えられている<sup>12</sup>。トスカナ女伯マティルダたちの仲介で懺悔した若き国王は破門を解かれるが、その後間もなくしてグレゴリウス7世をローマから追放した(1080)。

12世紀半ばのフリードリヒ1世バルバロッサは、その治世の多くをアルプス以南の地で過ごすこととなった。対立教皇アレクサンデル3世(位1159～81)との争い、北イタリア諸都市との戦い、ノルマン君主や東ローマ皇帝との外交交渉など、赤髯帝(バルバロッサ)は精神的にアルプスを往復した<sup>13</sup>。息子のハインリヒ6世(位1190～97)は南イタリアのノルマン君主の娘と結婚し、その間に生まれたフリードリヒ2世(位1212～50)はシチリアをはじめとするイタリアで多くを過ごした。第3回十字軍(1189～92)の途上、小アジアで死去したフリードリヒ1世とドイツを訪れることが稀だった孫のフリードリヒ2世のイメージがアルプス以北の地では混同され、融合して13世紀半ばには「偽フリードリヒ事件」が各地で伝えられ、フリードリヒ伝説の原型が次第に作り上げられていった<sup>14</sup>。こうした現象はアルプス山脈の向こうの世

界に対する当時のドイツの人々の異空間的なイメージが少なからず影響していたと見る事が出来よう。

大空位時代(1256～73)以降の中世後期(14～15世紀)の歴代君主たちもイタリア遠征を繰り返すことで皇帝戴冠を実現し、自らの権威の高揚に努めた。例えば、14世紀はじめ、ルクセンブルク家のハインリヒが1308年11月27日にフランクフルトで国王に選出され、翌1309年聖三



資料3 「ハインリヒ7世と従者のアルプス越え」を描いた挿絵(14世紀半ば)(N.オーラー『中世の旅』285頁より引用)

王の記念日にアーヘンで戴冠すると、ローマ行の準備に取り掛かった。この皇帝戴冠のためのハインリヒ7世(位1308～13)のローマ行については、彼の弟であるトリニア大司教バルドゥインの記録が残されている<sup>15</sup>。資料3はこれを描いたものである。1310年9月末にベルンに集結した一行は、ローザンヌからジュネーブに抜け、アルプス西部のフランク時代から用いられた古いルートを通ってスーザに入り、北イタリアのアスティに出て12月23日にミラノに入城した。ミラノのアンブロシウス修道院で伝統に従って「鉄の王冠」を戴いてランゴバルト王(イタリア王)となったハインリヒ7世は、その後ジェノバから船でピサに渡り、最終的に5月7日にローマ入城を果たした。イタリア到着時一行は、約2000の騎士を中心に荷運び人足やその他大勢を含めて1万近くに膨れ上がっていたと推測される。北イタリア諸都市は皇

帝派(ギベリン)と教皇派(ゲルフ)に分かれてルネサンス期まで対立したが、帝国の中心となるべきイタリアは分裂し、アルプス以北を支配する王権の担い手はオーストリアのハプスブルク家、ボヘミアのルクセンブルク家、バイエルンのヴィッテルスバハ家などが相互に相争い、跳躍選挙時代と呼ばれる不安定な時代が作り出された。ライン中流域地方をはじめとして教会勢力が台頭し、聖俗の帝国諸侯が分立した。カール4世の金印勅書による選挙王制の改革は、帝国の諸侯体制強化に決定的な役割を果たし、近代におけるドイツの集権化を大きく阻害した。こうして15世紀末にマクシミリアン1世(1493～1519)は遂にローマにおける戴冠を断念し、帝国は名実ともに「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」へと変貌していく。その孫カール5世(位1519～56)は、スペイン国王として頻繁にイタリアを経由してドイツと行き来するが、イタリア政策の意味は大きく変容した。

19世紀のドイツの歴史学者たちは、国民国家としてのドイツの指導者として歴代の皇帝たちを見たとき、彼らがドイツの国益を顧みずに無益なイタリア政策にエネルギーを消費したとして批判した。この「ドイツ皇帝政策論争」<sup>16</sup>と呼ばれる議論は、19世紀当時の価値観を中世という時代に投影したもので、そのまま受け入れることはできないが、そうした批判がなされるほど、彼らはドイツとイタリアを行き来したのであり、その際にアルプスは避けて通ることが出来ないルートであった。

巡回王権としての長い移動距離が国王・皇帝たちの寿命を縮めたという指摘もされるが、アルプス以南の風土がマラリアのような病気として多くのドイツ諸侯や兵士たちの命を奪ったという記述も見いだされる。フリードリヒ1世バルバロッサの第4回イタリア遠征(1166～67)の際、ローマを襲った疫病は皇帝の側近であったケルン大司教ライナルド・ダッセル、皇帝の甥のシュヴァーベン大公コンラート、ヴェルフ6世の後継者の若きヴェルフ7世など、多くの犠牲者を出した<sup>17</sup>。中世のアルプス越えは、歴史を大きく変えるポイントにもなったのである。

また国王・皇帝のイタリア遠征だけでなく、特に南ドイツの貴族たちは頻繁にイタリア貴族との間に交渉をもち、アルプスを行き来した。例えば、西南ドイツの有力貴族であったヴェルフェンの事例は、こうしたドイツ貴族がアルプス山脈を越えてイタリアと深く結びついていたことを教えてくれる<sup>18</sup>。11世紀にヴェルフェンの男系が絶えたとき、新たな家系の継承者となったヴェルフ4世は、北イタリアのエステ伯に嫁いだ娘クーングンデ(クニーツァ)の息子であった。次のヴェルフ5世は一時、トスカナ女伯マティルダと結婚し、シュヴァーベンからバイエルン・ケルンテンとトスカナ地方に<sup>またが</sup>跨る広大な勢力圏を築こうと企てた。またシュタウファーの国王コンラート3世とヴェルフェンの対立の後、国王選挙によって即位したフリードリヒ1世バルバロッサは、ヴェルフェンとの協調を図るために、長らく敵対してきたシュヴァーベンのヴェルフ6世に1152年6月の国王証書で「スポレート大公・トスカナ辺境伯・サルディーニア侯」の称号を付与している。この称号の実質的効果については定かではないが、当時のドイツ貴族が帝国諸侯身分として名誉ある地位を保持する上では意味のある称号であった。

## おわりに

アルプスの険しい地形は、自然環境的には南北ヨーロッパを分断する「壁」以外の何物でもなかった。しかし、中世ヨーロッパにおいては、この自然の障害を敢えて越える必要性が強く意識されたことは注目される。本論では神聖ローマ帝国の君主となるべく行われるローマ行やドイツ貴族の政治的・経済的利害の問題を紹介したのみである。しかし、自らの帰属する世界を古代ローマ帝国の延長線上に位置づけ、キリスト教世界としてイタリアとアルプス以北(ド



イツ) 地域とを一体化して捉えようとする思考は、現代のEUとは異なる次元で中世に作り出された独自のヨーロッパ意識の表れと見ることが出来るのではないだろうか。

今回はゴットアルド峠のルートが本格使用される13世紀以前の事例と中世後期の事例を区別して詳細に分析することが出来なかったが、アルプス山脈を迂回する傾向を含む西部や東部のルートではなく、中央突破のルートとしてこのゴットアルド峠のルートが果たした役割に注目するならば、これによってアルプスが単なる障害地帯ではなくなったことが重要であろう。

また、1218年のツェーリンガーの断絶と大空位時代の到来に伴う帝国の政治体制の動揺の中で1291年の原スイス誓約同盟(ウーリ・シュヴィーツ・ウンターヴァルデンの森林三州)を実現する背景を、ゴットアルド峠に象徴されるこの地域の政治的・社会的・経済的成熟が創り出したと言える。アルプス山岳地帯にスイスという国家が誕生することは、何を意味するのだろうか。ドイツとイタリアの間に独自の地域が形成され、政治的・文化的に自立していったのには、スイスを取り巻く政治的諸関係だけでなく、貧しく険しい地域だった一帯をひとつの地域共同体にまとめ上げる様々な要因があったからに違いない。スイスやオーストリアといったアルプス山脈の地域が自立性をもった共同体に成長する初期段階を中世のアルプス山脈をめぐる物資や人の往来、情報の伝達などが作り出していたと言えるだろう。それ故、中世のアルプスは、南北を遮断する単なる「壁」ではなくなりつつあったと言える。ヨーロッパの形成と多様性を生む重要な一面をここに見ることが出来るだろう。

## 1 ゴットアルド基底トンネルについて

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B4%E3%83%83%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%83%89%E9%89%84%E9%81%93%E3%83%88%E3%83%B3%E3%83%8D%E3%83%AB>

(2016年8月17日)

<http://www.swissinfo.ch/jpn/%E6%96%B0%E3%82%B4%E3%83%83%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%83%89%E5%9F%BA%E5%BA%95%E3%83%88%E3%83%B3%E3%83%8D%E3%83%AB-%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%AB%E8%B2%AB%E9%80%9A/28546532>

(2016年8月22日)

## 2 伊藤栄「アルプス越えの中世商業路ーサン・ゴタール峠、ブレンネル峠、サン・ベルナル峠」(『歴史教育』17-1 1969年)20～27頁。伊藤氏が利用したシュルテの研究は、A.Schulte, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluss von Venedig*, 1900,

シュルテの研究を紹介する他の邦語文献としては、春日茂男「アルプス交通路の変遷」(『大分大学経済論集』第2巻第2号、1951年)136～158頁、山口平四郎「アルプス峠の隧道」上下(『立命館文学』119・120号、1955年)269～293頁・361～382頁参照。

## 3 瀬原義生『スイス独立史研究』ミネルヴァ書房 2009年、64～70頁、同『精説スイス史』文理閣 2015年、36～39頁、同「ザンクト・ゴットハルト峠」(初出『健康』月刊健康出版社 第320号、

- 1988年7月／『大黒死病とヨーロッパ社会—中・近世社会史論雑編』文理閣 2016年)287～288頁。
- 4 アールネ＝トムスの『昔話の型』に収められたスイスの「悪魔の橋」のメルヘンについては、  
<http://www.pitt.edu/~dash/type1191.html#grimm337> (2016年8月23日)参照。
  - 5 桑野聡「ヴェルフェン＝ツェーリンガー同盟の成立と崩壊(1147/8～1162)」(『東海史学』第34号 2000年)95～122頁。
  - 6 研究史の概要は、平城照介「古代から中世への転換をめぐって」(山本茂・藤縄謙三・早川良弥・野口洋二・鈴木利章 編『西洋の歴史 古代・中世編』ミネルヴァ書房 1988年)179～182頁参照。  
 20世紀後半以降の中世をヨーロッパの形成期と捉えようとする立場については、例えば木村尚三郎「ヨーロッパにおける中世世界の成立」(共編著『中世史講座1 中世世界の成立』学生社 1983年)240～265頁、松本宣郎・前沢信行・河原温 編『文献解説 ヨーロッパの成立と発展』南窓社 2007年、124頁以下参照。
  - 7 例えば、ジャック・ル・ゴフ／酒井昌美 訳『ヨーロッパと中世・近世世界の歴史—その誕生と老齢化』多賀出版 1997年 17頁には、「ヨーロッパの最初の輪郭は『宗教・文化によって形成されたキリスト教的共同体』と『様々な王国から成るエスニックな古い文化的な伝統を基盤とした共同体』の二つの基礎によっており、それはヨーロッパでは『その始まり以来、統一が諸民族の多様性から創造されることを示している』」とある。
  - 8 アルフォンス・ドーブシュ／野崎直治・石川操・中村宏訳『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎—カエサルからカール大帝にいたる時代の』創文社 1980年。
  - 9 カール大帝の戴冠の歴史的意義については、出崎澄男「カール大帝の戴冠をめぐる諸解釈」(『ヨーロッパ キリスト教史2』中央出版社 1971年)、鷲頭英二「シャルルマーニュの皇帝戴冠」(『明治大学大学院紀要』文学篇15 1977年)、R.フォルツ／大島誠訳『シャルルマーニュの戴冠』白水社 1986年、五十嵐修『地上の夢キリスト教帝国—カール大帝の<ヨーロッパ>』講談社メチエ 2001年、同『王国・教会・帝国：カール大帝期の王権と国家』知泉書館 2010年、など参照。
  - 10 カール大帝からカロリinger末期諸王に至る帝国理念・国家観の問題については、日置雅子「カール大帝の帝国分割令(806年)」(『愛知県立大学論叢』一般教育篇27 1978年)、同「ルートヴィヒ敬虔帝の帝国整備令(817年)」(『愛知県立大学論叢』一般教育篇29・30 1979・80年)、同「ロタール1世の皇帝権」(1)～(5) (『愛知県立大学論叢』一般教育篇33・34・35・36 1983・84・86・87年、『愛知県立大学創立20周年記念論集』1985年)、同「カール2世(禿頭王)の皇帝権」(長谷川博隆編『ヨーロッパ—国家・中間権力・民衆』名古屋大学出版会 1985年)、同「カロリinger・フランクにおける「フランキア」の統一と解体」(1)(2)–1・2 (『愛知県立大学論叢』一般教育篇38・39・41 1989・90・92年)など参照。
  - 11 カロリinger末期以降のイタリアについては、渡辺金一「正教世界の成立」(『岩波講座世界歴史7 中世1』岩波書店 1969年)、山田欣吾「国王・大公・教会—カロリinger後期からオットーネン初期の国制をめぐって」(『教会から国家へ—古相のヨーロッパ』創文社 1992年)など参照。
  - 12 「カノッサの屈辱」事件におけるハインリヒ4世のアルプス越えについては、ヘルスフェルトのランペルトの史料に依拠しながら、N.オーラーが伝えてくれる。ノルベルト・オーラー／藤代幸一訳『中世の旅』法政大学出版局 1989年、174～176頁。
  - 13 荒井正光「フリードリヒ1世・バルバロッサにみる帝国理念とその実現」(『同志社大学文化史学』54 1998年)91～111頁。また皇帝と教皇アレクサンデル3世の対立については、桑野聡「1165年

- のシュタウファー＝アンジュー二重婚姻協定」(『郡山女子大学紀要』第33集 1997年)参照。フリードリヒ・バルバロッサの生涯については、瀬原義生「フリードリヒ1世・バルバロッサ」(1)(2)(『ドイツ中世前期の歴史像』文理閣 2012年)400～436頁参照。
- 14 バルバロッサの不死伝説については、森田安一「フリードリヒの不死伝説」(木村靖二編『ドイツの歴史－新ヨーロッパ中心国の軌跡』有斐閣アルマ 2000年)22～24頁、偽フリードリヒ事件については、阿部謹也「偽皇帝伝説覚え書－カリスマの死以後」(『歴史と叙述－社会史への道』人文書院 1985年)174～201頁。
- 15 前掲、N. オーラー『中世の旅』280～293頁。瀬原義生「ハインリヒ7世－皇帝理念の心酔者」(『ドイツ中世後期の歴史像』文理閣 2011年)56～70頁
- 16 増田四郎「独逸皇帝政策文献抄」(『一橋論叢』2-6 1937年)
- 17 2000人以上の被害を出したとされるこの惨事については、*Historia Welforum* c.32.参照。邦語文献であれば、19世紀のロマン主義的古典フリードリヒ・フォン・ラウマー／柳井尚子訳『騎士の時代－ドイツ中世の王家の興亡』法政大学出版局 1992年、176頁参照。
- 18 カール・ヨルダン／瀬原義生訳『ザクセン大公ハインリヒ獅子公』ミネルヴァ書房 2004年参照。